

日本近代文学に表象された「寒山拾得」

陸

艶

【抄録】

長年、日本近代文学と中国との関わりを視点として研究してきた私は、故郷の蘇州にある寒山寺に縁があったという「寒山拾得」が日本近代文学に度々登場していたことを知った。また、文学に留まらず日本の禅画や謡曲などにも多くとりあげられていることを知った。

そこで、中国では既に忘れ去られている「寒山拾得」が、なぜ日本で脚光を浴びたのかについて、その実態を調査し、「寒山拾得」の日本近代文学に与えた影響を研究した。

まず、「寒山拾得」の日中像の差異について検討するために日本文学の古典に遡り、その背景を調査した。その上で、森鷗外をはじめとして、日本近代文学の著名な作家による「寒山拾得」の捉え方を調査し、中国の「寒山拾得」との比較検討を行った。

その結果、日本文学における「寒山拾得」像には、日本独自のイメージで描写されていることが明らかになった。中国での「寒山拾得」は、道教思想のイメージで表現され、仙人とも言われているが、日本近代文学に表象された「寒山拾得」とは、日本で長年の間に育まれた仏教思想・禅思想の形象化を担って書き記されているのであった。

また、「寒山拾得」が、日本の中では俳画にも出没し、陶器にも描かれるなど、文学以外にも日本文化の中に広く浸透していることが明らかになった。

キーワード…寒山拾得、日本文学、中国文学、仏教思想、道教はじめに

寒山は、中国唐代、七世紀頃浙江省天台山に住んでいた修行

者で、詩人であつたとも言われている。また仏敎と道教の隠者でもある。その友人である拾得とともに、奇怪な風貌、常人離れした言動、奇瑞な行動などにより、後世神聖（仙）⁽¹⁾化され、多くの伝説、詩文、絵画を作り出した。張石は、⁽²⁾

日本の明治維新から現代文学史に至る、多くの文学巨匠が新たな日本文学の局面を開辟していた。その日本近代文学者たちはある程度寒山の影響を受けていたことがわかった。しかしながら、寒山拾得は中国文学に対して大きな影響は見られない。また、中国近代文学にも影響がみられない。これに対して、日本古代の宗教、文学、芸術には大きな影響を及ぼしている。

「寒山拾得は中国文学に対して大きな影響は見られない。また、中国近代文学にも影響がみられない。それに対して、これに対して、日本古代の宗教、文学、芸術には大きな影響を及ぼしている」と指摘しているこの原因はなんだろう。

そこで、古田島洋介は中国では寒山拾得の話は主に作品「寒山詩」と伝説受け継がれている。日本における受容も作品を通じて行われ、特に近世の白隠慧鶴（江戸時代中期の禅僧）による「寒山詩」注釈『寒山詩闡提記聞』が後世への影響が大きい

く、これは若生国栄『寒山詩講義』や渡辺海旭『寒山詩講話』を経て明治、大正文学における寒山拾得の形象化に繋がっていることを指摘している。本論では、従来、中国では既に忘れられていた「寒山拾得」が、なぜ日本で脚光を浴びたのかについて、その実態を調査し、「寒山拾得」の日本文学に与えた影響を研究していく。特に「寒山拾得」をタイトルに掲げる近代の小説を取り上げ、それらが一般的な大衆文学として受容され、次々に作品が生み出された背景を分析する。

一、中国文学の中の「寒山拾得」像

まず、中国文学における「寒山拾得」像について確認する。明初期の政治家で軍師でもある姚広孝は、医者の家柄を持つが、十四歳で出家して道衍と称した。以後仏法や道教を学んで、陰陽術も学んだ。彼が編纂した『蘇州府誌』⁽⁴⁾によると、

唐元和有寒山子、掣瘋掣顛。來此縛茅以居、尋遊天臺寒巖、與拾得、豐幹為友、終隱而去。寒山寺相傳寒山、拾得嘗止此、故名。

ここでは、唐元和年間に寒山は、風狂な人である。茅葺の家

屋に居住していた。天台寒巖を巡り歩き、その後拾得と豊干と知り合い、以後、寒山と拾得は隠棲生活をはじめた。寒山寺は永樂三年深谷和禪師が、寒山拾得の本質を忘れないため方丈室を設けたと記述していた。仏教、道教を学んでいた姚広孝は「寒山拾得」のことを提及するだけでなく、それを本にして後人達に勉強することも、寒山の思想が深く影響していることが解る。

寒山是一位影響深遠的奇人、影響範圍包括儒、釋、道三家、影響地域遠達國內外。引人註目的蘇州寒山寺、即以寒山命名、因為寒山曾於此寺住過、清代葉昌熾著《寒山寺誌》記載說、寒山寺、創建於梁天監時、舊名妙利普名塔院、以寒山子曾居此寺、故即以為名。

清代葉昌熾『寒山寺誌』によると、寒山は儒教、仏教、道教の三家に深遠な影響を及ぼしている。その範囲は中国国内だけでなく海外にも深く影響を与えていた。寒山寺は梁天監の時に創立し、元の正式名は妙利普名塔院といい、嘗て寒山がこのお寺に住んだことがあることで通称寒山寺に変わった。

贊寧は呉越呉興德清人である。九三四年に天台山に入つて具足戒をうけた。四分律、儒教、道教の二教にも通じていた。彼

の『宋高僧傳』太平興国七年⁽⁵⁾(九八二年)卷一九は、唐、五代、北宋初期の高僧の伝記を集めた書物である。この中の寒山と拾得は、世の中で貧しく風狂ものとよばれている。二人は友人である。仏教にも精通している。閭丘は衣服と薬物を送るためお寺へ行った。寒山と拾得が閭丘を見て呵呵大笑して逃げ出した。以後、寒山と拾得は隠棲生活をはじめた。その後、道翹が寒山の遺物を探しだして、三百首を集め、多くの読者を得た。のち、曹山寂禪師によつて注釈されている。その注釈本の中の「寒山拾得」は奇怪な行動をとっているが、二人は仏教をよく知っている。それ故に寒山が書いた詩が当時の世の中に大変影響を与えたことが窺える。

蘇州承天の道原の作『景德伝燈録』⁽⁶⁾(一〇〇四年)卷二七では、北宋の景德一年に真宗に上進し、勅許によつて入藏された。

天台豊干禪師者不知何許人也居天台山国清寺剪髮剃眉衣布裘人或問佛理止答随时二字嘗誦唱道歌乘虎入松門衆僧驚畏本寺厨中有二苦行曰寒山子拾得二人執事終日晤語潛聽者都不體解時誦風狂子獨與師相親

ここでは、「豊干禪師は、出身がどこかは誰も知らない、天

台山国清寺に住んでいる。眉の位置で切り揃えた前髪、毛皮の服を着ていた。仏法の問に対しての答えはいつも「隨時」という二文字である。道歌を唱えながら虎に乗って松門に入った。衆僧はこれを見て畏敬していた。また、本寺の厨房には寒山と拾得二人苦行の者がいる。毎日、道理を禪悟のために討議していたが、周りの人々はそれを理解できなかった。この二人は風狂な者と見られたが、豊干と親しくなった」という記述が見られる。「寒山拾得」は常に豊干と討議することによって、一定な道教や仏教の知識を持っていることが解る。

寒山子者、不知其名氏。大曆中、隱居天台翠屏山。其山深邃、當暑有雪、亦名寒岩、因自號寒山子。好為詩、每得一篇一句、輒題於樹間石上。有好事者、隨而錄之。凡三百餘首。多述山林幽隱之興、或譏諷時態、能警勵流俗。桐栢徵君徐靈府。序而集之、分為三卷、行於人間。十餘年忽不復見。咸通十二年、毘陵道士李褐、性褊急、好凌侮人。忽有貧士詣褐乞食、褐不之與、加以叱責。貧者唯唯而去。數日、有白馬從白衣者六七人詣褐、褐禮接之。因問褐曰：「頗相記乎。褐視其狀貌、乃前之貧士也。遂巡欲謝之、慚未發言。忽語褐曰：『子修道未知其門、而好凌人侮俗、何道可冀。子頗知有寒山子邪。』答曰：『知。』曰：『即吾是矣。

吾始謂汝可教、今不可也。修生之道、除嗜去欲、齋神抱和、所以無累也；內抑其心、外檢其身、所以無過也；先人後己、知柔守謙、所以安身也；善推於人、不善歸諸身、所以積德也。功不在大。立之無怠、過不在大、去而不貳、所以積功也。然後內行充而外丹至。可以冀道於髣髴耳。子之三毒未剪、以冠簪為飾、可謂虎豹之鞞、而犬豕之質也。」出門乘馬而去、竟不復見。出《仙傳拾遺》

この文章では、唐末の天台道士杜光庭が『仙傳拾遺』を典拠したものである。「唐の大暦年間に翠屏山で隠居している寒山は元の名は誰も知らない、寒岩で隠居していることで寒山という名になった。木の上や石の上で三百余りの詩を刻んだ。殆ど世の中への教訓の詩である。咸通十二年に毘陵道士は李褐は性格せっかちである。人をいじめることが多くしていた。ある日、乞食の人が家の前で乞食をしたら、彼はそれを追い出した。その後また一人、六、七人の白馬に乗った従者がいる方が来た、李褐は、礼儀正しく応接していた。しかしその方ははじめという乞食の人が分かった。」という話である。以貌取人の李褐はすっかり教訓を受けた。

一方、中国民間では「寒山拾得」はもう一つの呼び名がある。「和合二仙」と呼ばれていて、その由来は嚴雅美⁽⁷⁾は、

「天台二聖」寒山、拾得演變為「和合二仙」、造型為一持荷花一捧圓盒（「荷盒」諧音「和合」），專司婚姻美滿、家庭和睦的兩名童子，在明、清時期江浙地區、「和合二仙」的藝術形象遍及繪畫、刺繡、雕刻、陶瓷、剪紙等藝術門類、江南百姓在婚事喜慶偏愛「和合二仙」所表現出的討喜造型、民間藝術家背後的創作泉源，是跟中國固有的、以「和」為貴的思想有關，任平先生認為「和」的思想創自先秦儒家，「合」的思想主要來自道家，寒山文化亦即「和合文化」⁽⁸⁾

民間文化によって、「天台二聖」寒山と拾得は「和合二仙」に変遷した。いつものぼろぼろ服を着て、げらげら笑っていた二人の僧侶造形から蓮を託して、手に丸箱を持っていた二人の童子の姿に変えた。寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩という説も、結婚場のめでたい象徴となっていた。中国の民間で婚姻円満、家庭健康の象徴になる。さらに、清朝に芸術作品の中でもモデルとして登場していた。絵、刺繡、彫刻、陶芸、切り紙などに登場することは度々である。「和合二仙」研究する任平先生は「和」の思想は前秦の儒家で創立した、「合」の思想は主に道家である。「寒山文化」は「和合文化」と指摘していた。いわゆる、「寒山拾得」は儒教と道教の結晶文化である。

日本近代文学に表象された「寒山拾得」(陸 艶)

嚴雅美⁽⁹⁾では絵画の面から「寒山拾得」を見る

常見的題材、尤其是「寒山拾得」也為浙派人士所常畫。但是浙派人士所畫的「寒山拾得」在造型特徵上雖然蹈襲了禪宗模式，卻融入了許多道教意味於其中，使原屬禪宗的「寒山拾得」看似與道教仙人很難分。如一副蔣貴所畫的「寒山拾得」，拾得的造型尚還有保留了原樣，然而寒山卻是頭戴方巾、身著交領衣袍、還蓄有鬚鬚的文士造型，除卻其臉上滑稽的神情已非禪宗人物而似道教仙人之流



寒山拾得像 (明・蔣貴繪)

明末の画家蔣貴が描いた「寒山拾得」の絵では、拾得の禪宗の造形はまたそのまま残っていたが、寒山は頭巾を巻き、身には衣服を着て、また髭を伸ばしている形で文士の格好に変更し

ていた。顔の表情はまた滑稽のままだけど、禪宗人物のように
はなっていない。道教の仙人の格好によく似ているのである。



和合二仙像

进入明清后、禪宗鲜活的生命力已逐渐走向衰竭、其对寒山
绘画的影响也不再明显。这时、随着社会思潮的变化以及寒
山传说的流变、寒山绘画又出现了两个新的特征、可称之为
道教化与民俗化、所谓道教化是指在前代绘画中以禪宗逸僧
面貌出现的寒山造型开始与道教仙人的造型混同、甚至直接
以仙人入画。所谓民俗化是指随着「和合二仙」传说及信仰的
形成、寒山拾得被赋予了象征和谐好合的「和合二仙」的新
身份、于是相应的寒山拾得绘画也走向民俗化、大多充满吉
庆祥和的气氛。

明清に至ると、禪宗の生命力が次第に衰弱し、寒山の絵も明
の時とは異なってきた。この時の社会的思想変化によって、寒
山の絵が二つ新たな特徴が現れていた、道教化と民俗化に演変
した。いわゆる、前代の禪宗逸僧風貌と道教仙人の造形の混同
で、甚だしく仙人のように描かれた。いわゆる民間の「和合二
仙」の新身分を作らしていた。

総じていうと、唐末から現在に至って、中国は仏教では寒山
が文殊の化身といわれ、道教は寒山が神仙の転生と見なしてい
る。一方、「和合二仙」は民間の道教文化の派生になっている。

以上が中国文学の中の「寒山拾得」像であるが、ここまでの
調査で、寒山と拾得が世俗を厭って、世俗から離れて自由自在
の生活をしていることが分かる。また、それは道教の仙人とし
て一種の修業方式ともいえるだろう。いわゆる、禪境との対立
について諸法無我、真理に従い、外界のものをすべて空と見な
す。これは独立存在、一切否定する、禪の精神そのものである。
快樂主義者のような生活様式における美意識を廃し、脱
俗、超俗のスタイルを重視したようである。この存在感を現す
ために、とぼけた風体のユーモラスなイメージで描かれてい
る。また、禪宗から道教に演変する民間化によって、中国の
「寒山拾得」は社会の変貌に沿って変貌した。

二、日本の古典文学の中の「寒山拾得」

次に日本文学の古典の「寒山拾得」を検討する。「寒山拾得」は日本の鎌倉時代から江戸時代にも投影されており、俳画にも表現され、また陶器にも描かれている。

熙寧五延久四（一〇七二）年、成尋は人から『寒山詩』をもらった。『參天台五台山記・卷二』は最も早く、正中二年（一三二五）年に覆刻した最初の刊行である。注釈には江戸時代の禅僧による『首書寒山詩』『寒山詩管解』『寒山詩索隠』『寒山詩闡提記聞』があり、白隠禅師が詳しく述べている。寒山の詩は、中国では唐末から禅僧に好まれて引用されているが、日本においては、良寛の詩や謡曲に影響を及ぼしていることが窺える。

無住の『沙石集』（一二八三年）には、日本・中国・インドの諸国に題材を求め、靈驗談・高僧伝から、各地を遊歴した無住自身の見聞を元に諸国の事物が描かれているが、「寒山拾得」の姿も描かれている。

卷七では、「寒山拾得」が世の中の人々の行為を見て、泣き出す場面がある。全集の解題では、人間は平等の慈悲を起し、父母への孝養の懇志を励まして、衆生を救い助ける必要がある。欲をおさめることが大事なことであるという。万劫煩惱

のもとであるという解釈をしている。ここでは、父母の孝のために泣くという描き方がされており、珍しい描写である。

また、禅文学研究の成果を凝縮した『蕉堅藁』（一四〇三年）では寒山拾得は高風な人で、百年くらい生きていと書かれている。『瑤囊鈔』（一五世紀）では、寒山と拾得は文殊と普賢だと明確に書かれている。ある寺の菩薩の説戒を見ている場面から最後の悲しみ、泣く場面までの記述は、無住の『沙石集』と同様の説であることが分かった。

『雑談集』（一四世紀）では、禅宗の教えが書かれている。伝灯録の初めに採録されている。豊干、寒山、拾得、傳大士、宝諸和尚等も見受けられる。『中世古今集注釈書解題』の弘安十年古今集歌注において、四仙とは、豊干・寒山・拾得・費長房と言われている。

『仮名草子集』¹⁰（作品により前後はあるものの一七世紀ごろ）の作品では、貴族・僧侶・上流武家に専有されていた文字伝達による文化が、太平時代を迎えて識字層となった武家全般に広まった。寒山拾得に関する内容は「一休ばなし」卷一五、一休和尚風骨の事の一節である。一休和尚は貴賤士庶別無く生涯定住しなかった。「一休和尚の御志を思ひみるに、寒山子の風狂にかはる事なし」という表現がある。一休和尚の気性を推量すると、寒山の風狂と変わるところがないという意味である。寒

山は文殊菩薩のことで、一休は普賢菩薩の化身のことである。ここでは、いつもペアで書かれた拾得のことが見え、拾得に変わって一休和尚を登場させた。

元禄二年に寒山の自画自賛の俳諧を書いた松尾芭蕉の書物では、寒山拾得は、禅僧として扱われている。「庭はきて雪を忘るる箒哉」という句で、寒山が雪を掃く姿、その余念を棄て、ひたすら箒に集中している禅僧寒山を読んだ句である。「寒山拾得」は日本の上流社会・僧侶の中での一種教養としていられるのである。

三、日本近代文学の中の「寒山拾得」像

海を越えた日本では多くの著名な作家が「寒山拾得」を取り上げ、文学・芸術などに大きな影響をもたらした。近代日本は明治以降、文明開化の言葉に代表されるように西欧の哲学・風俗・文学・など多種多様な文化を取り入れた。日本人の知的関心・美的価値の基準は、中国志向から西欧志向へ急展開した。その中で、再び東洋（中国）思想の回帰が起こる。中でも特に大正から昭和初期にかけての日本の文学界には超俗的に風狂で人生を貫徹した多くの「寒山拾得」が登場する。古来よりの日本の仏教文化の中で形を持たない禅思想が「寒山拾得」という

形象化した形をとって登場する。「寒山拾得」という、この形象化した禅の形は、取り扱いやすかったこともあり、文学の他にも禅画や歌謡など広く日本文化の中に登場した。

1、森鷗外

明治時代になり、文明開化の風俗を取り入れた文学が生まれてきた。勸善懲惡思想から解放する試みが行われ、明治時代になり、日本人の知的関心、美的価値の基準は、中国志向から西欧志向へ急展開した。その中で森鷗外は、漢文脈と雅文脈を混合した独特の文体を展開した。作品としては大正五年（一九一六）「新小説」に鷗外の歴史小説では最後にあたる「寒山拾得」がある。明治から大正初めから中頃まで、「魔仏毀釈運動」が起こった。

従来、明治、大正教養を持つ森鷗外の「寒山拾得」は歴史小説と評されているが、同時代の仏教的教養との関係から、この作品と考察すると、新たな見解を示すことができると考えられる。

まず、この作品の典拠が、中国の作品『宋高僧伝―卷一九感通篇』であることは、すでに多くの研究で論じられている。鷗外の「寒山拾得」は、『寒山詩集序』の文脈中、詰めどころを大胆に省略・組み替えることにより、一層深遠な仏理を醸す一

文となっており、「禪小説」を開眼した野心作ともいえる。

鷗外は「縁起」の中に、この短編を書く時には、「寒山拾得」の参考書を一冊も読まなかったと述べている。しかし、鷗外が書いた「寒山拾得」と『寒山詩集序』の記述はまったく一致している。つまり、寒山と拾得は、鷗外にとっては葦編三絶のように読んでいたのだろう。だからこそ、鷗外は「寒山拾得」を解りやすく簡単に書くことができたのである。

後から付けられた「寒山拾得縁起」大正五年（一九一六）には、なぜ「寒山拾得」を書いたのかについて動機が書かれている。大正時代には寒山ということが、日本中に普及していた。どこもかしこも「寒山詩集」や寒山に関する広告が見られた。そのような背景のもとで自分の娘が「寒山拾得」に強い興味を持ち始めた。

「寒山拾得」は、鷗外自身が「寒山拾得縁起」で、

漢字ばかりで書いた漢詩は、当時の修養のため読むべき本であつた。子供のために、詩はむずかしくてわからないかもしれないが、その寒山や、それと一緒にいる拾得は、どんな人であるかを分かりやすく書いた作品である

と述べている。

鷗外にとって、寒山と拾得とは何者なのか。寒山は文殊、拾得は普賢というが、二人は隠者なのである。隠者とは老荘思想を身をもって体現している人である。仙人ともよばれている人たちでもある。

この短編には、中国における主要な思想である、儒教・仏教・道教を象徴する三種類の人間たちが登場する。閻が儒教、豊干が仏教、寒山と拾得が道教に当てはまることが見られる。

このような図式でみると、寒山と拾得が閻を見て、笑いこらげて逃げ出した理由が解読できる。それは、閻の住む世界は俗の世界であり、寒山と拾得の住む世界とは相容れないからである。つまり、俗は仙人に決定的に無視された格好である。官吏である閻が二人の仙人によって笑い飛ばされたのである。

また、本文の中には、「因縁」という用語が使われている。主人公の閻は、科挙に応ずるために、経書を読んで、五言の詩を作ることを習ったばかりで、仏典を読んだこともなく、老子を研究したこともないという設定である。しかし、僧侶や道士というものに対しては、疑問なく尊敬の念を持っているのである。自分の会得せぬものに対する盲目の尊敬と言えるだろう。

四大（地、水、火、風）の身を悩ます病は幻である。仏教において、事物はすべて四大が仮に合したもので、実体のないものとする説もある。

呪で治せること、群生を福利し憐憫を折伏すること、乞食がいた点などはこの世界を指すのである。また、鷗外は「寒山拾得」と同じ大正五年に「高瀬舟」を発表している。この作品においても、ともに人間の悟りを文学的に形象化したものである。これらの作品は鷗外の仏教道教的な悟境であるともいえるだろう。

森鷗外の「寒山拾得」では、主人公閭丘胤では仏教も知らず、老子も分らない、しかし、乞食のような豊干が自分の頭痛を治してくれたので、豊干のお話を聞いて、お寺へ感謝しに行くようになったのである。しかも、豊干ではなく、「寒山拾得」という知らない二人に対して感謝していくのである。これによって、鷗外は、三通りの態度を説いた。つまり、道や宗教への態度としては、一は、道に無頓着な態度である。二は、着意して道を求める態度である。三は、無頓着なものと求道の態度との中間である。鷗外はこれらを「盲目の尊重」と呼んだのであった。この後述「盲目の尊重」は、芥川龍之介の「寒山拾得」の中にも同じ表現が見える。自分はすでに忘れさられた「寒山拾得」だが、隣の男から教えてもらったことによって寒山拾得がまた東京の現代の町に歩いていたことが表現されている。

道教は漢民族の土着的・伝統的な宗教である。これは充分大

きな文化の総合体でもある。中国の歴史、文化、医学等の発展に重大な影響をもたらしていた。仏教は中国人にとって外来教ともいう、中華民族文化習俗に基準上では、中国文化に大きな影響がある宗教である。両教はお互いに似たようなものもあるが、差異もある。基本的な区別は、道教の主張は真実を以て、不老長寿を追求、また肉体仙人をめざす。道教は必ず形と精神を一緒に修養する。いわゆる内修と外養的な修業が必要である。それに対して佛教は現実には苦海のように、人々は無能力この世界を脱出ことはできないので、忍ぶしかない。自分の欲望を修め、すべてを来生に託する。

道教は現実生活を追求することが分かる。道教とは「道の教え」である。広義には、「従うべき聖人の超え」という意味で、「老子」「莊子」の教えである。狭義には、「首過」「符水」符を入れた水を飲むなどで病を癒すようなものや鬼神への懺悔である。儒教が古代中国の知識階級を対象にした道徳・規範の教えだったとすれば、道教は庶民の生活に根付き日々の幸を大切にするを教えた。魯迅は「道教が分かれば中国が分かる」と書いたが、空飛ぶ仙人や不老不死を願う道教の懐の大きさには感じ入らざるを得ない。道教は、弥生時代から平安時代に掛けて、日本列島にやってきた。大陸発の移民たちが断続的に、或いは断片的に持ち込んだ教えで、これらが次第に既存の仏教

や神道とも混じり合い日本の新しい習俗を形成していった。過去に、道教が系統的に日本に上陸した形跡は無い。森鷗外の「寒山拾得」の本文の中に閻は頭痛がした時に、「四大の身を悩ます病は幻でございます。只清浄な水が此受糧器に一ぱいあれば宜しい。呪で直して進めます。」とあるが、森鷗外の作品の中に四大は道教の道、天、地、王をいう語である。呪で直されることは、道教の「符水」符を入れた水を飲むなどで病を癒すようなものである。

2、夏目漱石

夏目漱石は、明治二十九年に俳句「寒山か拾得か蜂に螫れしは」を詠んだ。寒山か拾得か蜂にさされたのはどちらかは分からない。倒置法であり、なにか可笑しみを読者に感じさせという内容であり、漱石らしいユーモアである。

寒山拾得の話というと、国も時代も異なり、禪という特殊な世界のことであり、我々には縁の遠い世界のこととして感じられる。しかし、その寒山拾得も我々と同じこの世の人間である。蜂に刺されたというのは、あの不思議でありがたい俳句の中の人物なのであった。蜂に刺されるというのは、日常ありふれた出来事である。ありがたい仏の神聖さと、日常的な俗が取り合わされることでおかしみがある。寒山拾得を我々の日常に

近づけたところに、漱石のユーモアがあると言ってもよい。

3、芥川龍之介

芥川龍之介の「寒山拾得」（一九一八）では、主人公が夏目漱石先生の所へ行き、帰りの電車の中で、東京の町に往来を妙な男が二人連れが歩いているのを見る。彼らの服装はボロボロである。自分はすでに彼らの事を忘れたが、隣りの道具屋風の男が「寒山拾得が歩いているな」と言う。そう言われてみると、二人は巻物と箒を持って歩いていた。そこで作者は聞いてみた「ありや本当に昔の寒山拾得ですか」と聞く。すると、男は「そうです。この間も商工会議所のところで見ました。彼らは死にやしません。ああ見えたつて、普賢文殊です。友だちの豊干の大将も、よく虎に乗つて銀座通りを歩いてますぜ」と答える。さきほどの寒山拾得が妙に懐かしくなり、電車の窓から彼らの姿を探す。すると、彼らは豆粒のように小さくなりながらも、朗らかな晩秋の日の光の中に、箒をかついで歩いていたのである。家に帰ると、漱石先生に「今日、飯田橋で寒山拾得に出会いました」と手紙を書くと思う。そして、彼らが現代の東京を歩いても、ほぼ無理がないような心もちがし「売り立て流行りの寒山拾得が東京の町に歩いてゐること」と結ぶのである。ここには、日常生活から捉えている歴史再考ができ

る。薄汚い男を想像させ、民衆的な基層文化から捉えなおすことができる。寒山拾得の東洋精神がまだ生きていることによつて、精神解放を求めてこの世から抜け出したい気持ちが読み取れる。これは日本の近代文学者が売文生活から癒される唯一の精神解放の夢でもある。

乾英治郎の芥川「寒山拾得」試論によると、

芥川にとつて大正六年秋ということを少し考えてみる。この時期、親友・井川恭宛書簡中に二度に渡つて「隱遁」志向を披瀝している。一つ目の書簡（大正六・八・二九付）では、学校を辞めて「花に浣いだり本を読んだりしてばかり」の閑静にくらしたいと吐露した上で、僕は元來東洋のエピキュリアルだから、この間も支那の隱居趣味を吹聴した本を読んで大に同情した

と述べている。寒山拾得がこの時期に構想されたとすれば、創作の苦悩や隱遁志向を通じて煩惱や世を棄て、そのモチーフとして「寒山拾得」が使われているとも考えられる。

芥川が大正九年（一九二〇）三月に発表した「東洋の秋」では、

寒山拾得は生きてゐる。永劫の流転を閲しながらも、今日猶この公園の篠懸の落葉を搔いてゐる。あの二人が生きてゐる限り、懐しい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去つてゐないのに違ひない。売文生活に疲れたおれをよみ返らせてくれる秋の夢は。おれは篠の杖を小脇にした儘、気軽に口笛を吹き鳴らして、篠懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。「寒山拾得は生きてゐる」と、口の内に独り呟きながら。

という売文生活の苦しみからが隱遁した気持ちを湧き出していた。これに続き、井伏鱒二も売文生活に売れない自分の感慨をもらしていた。

4、井伏鱒二

井伏鱒二の「寒山拾得」⁽¹⁾大正一四年（一九二五）では、寒山拾得の絵は、当時、売れない代名詞であつた。当時の文学者の小説のように売れないと比喻している。

前田貞昭は「井伏鱒二の「寒山拾得」は、『陣痛時代』大正十五年正月創刊号に発表された作品である。その時期に発表された「寒山拾得」が、井伏の不遇と失意を語る作品として捉えてきたのは極めて当然である」と述べている。

例えば、湧田佑は、鷗外の同題作品に言及し、

うらぶれた二人の友の邂逅と酒氣の果ての愚行を描いているもので、禅味横溢する鷗外の寒山拾得を、井伏は現実の世界にひきずり出し思い切って戯画化するのだが、押さえるようと悲哀がペーソスとなってその裏からこぼれ落ちていく

と評し、その笑いを、悲哀・陰鬱・絶望と解するのか、あるいは、自身を対象化による脱却の方向性を含むと解するのかの相違はあるにせよ笑いが含まれていることを指摘している。この先行研究では、暗い失意の時代を生きる自画像を、作中の旅絵師佐竹小一に重ねつつ、戯画的、自虐的に描き出した作品であることといえよう。世から井伏の精神的自画像へと収斂する、井伏は世に飽きられ、それと離れたいという気持ちが見える、それと、「寒山拾得」と重ねて、禅の思想の一脱俗することになることが表現されているのだろう。

5、岡本かの子

仏教研究者として有名な岡本かの子は、昭和三年（一九二八）に一〇月から「散華抄―劇曲寒山拾得」を読売新聞の宗教

日本近代文学に表象された「寒山拾得」（陸 艶）

欄に連載した。中国では忘れ去られていたが、日本では文学的教養として見直され、しかも新聞に掲載されている。「寒山拾得」もこのことから「寒山拾得」は一般的に認識されていたといえよう。この作品の中でも仏教に関すること書かれていた。禅は人生を生きる処世の一態度であり、倫理や思想であり、処世の哲学であるというのである。

当時の読売新聞で連載された作品には、寒山と拾得の笑い声を捉えて「あつははははは、やちひひひ」などの擬音語が使われていることが多い。大手の新聞に掲載された寒山拾得は、一般層に広まっていたのである。

禅宗は、もともと不立文字、教化別伝を振り回し、以心伝心によってお釈迦様が悟道した心印を衆生の心に伝えるものである。そのことを誇りとして經典に捉われず、直観的な悟りの境地を用いるのであるが、ここで取り上げる作家たちは、そのことを日常の言葉で素直に示したものと考えられる。石川淳の「岡本かの子論」は、縁起観輪廻観の現れを文学的に解明した。

6、土田耕平

土田耕平「寒山拾得」一九四九（昭和二四）では森鷗外の「寒山拾得」から発想を得ていると感じられる。寒山と拾得が高僧ということは誰も知らないという設定である。ここでは、

パロディーとして展開されている。なぜ土田が、森鷗外と同じタイトルで、内容もほぼ変わらないような短編を書いたのだろうか。これは「寒山拾得」という事蹟が実際に民衆の心に花咲いたようであつたからといえよう。当時の人々の思想精神の種である。

「寒山拾得」は、奇怪な風貌、常人離れた言動、奇瑞な行動などにより、後世神聖化され、多くの伝説・詩文・絵画を作り出した。例えば、坪内逍遙による謡曲の脚本「寒山拾得」(一九一四)では、寒山拾得をはじめとする禅思想・禅知識が、一般的に広く浸透していたことが窺える。また幸田露伴「観画談」の中にも生死を超え、名利の角度から「寒山」と「寒山詩」を把握できることが判明できる。

四、文学以外の日本の「寒山拾得」

日本では近代に至るまで、「寒山拾得」を主題としたものは、文学だけにとどまらず、禅画や謡曲のジャンルにおいても登場する。

中世から近代に至る日本文学の中に表れた「寒山拾得」像は様々な作品に採り上げられ、寒山拾得特有の容貌、服装、動作、笑い声の描写などが、好意的な扱いをされたものと見るこ

とができる。

絵画の分野では、ニタリと不気味に笑う寒山拾得のアルカイックスマイルが、岸田劉生「麗子像」のモデルとなったことは有名であり、後の伝承・伝説・図画のオリジナルソースとして位置づけられていた。また、「野童女」(一九二二)は、顔輝の寒山拾得図をモデルとしたものである。この人間離れた「笑い」は、たとえば能面「猩々」などのように、悟りを得た者＝人間界を超越した者の霊的風景を描いたものかもしれない。芥川龍之介も自分の作品「支那の画」の中で、

古怪な寒山拾得の顔に、「靈魂の微笑」を見たものは、岸田劉生氏だつたかと思ふ。もしその「靈魂の微笑」の蔭に、多少の悪戯を点じたとすれば、それは冬の化け物である。この水墨の薄明りの中に、或は泣き、或は笑ふ、愛すべき異類異形である。

と「寒山拾得」の絵を見て岸田劉生のことを想像したことが書かれていた。

禅画としては、白隠(一六八五)や仙厓(一七五〇)の筆で描かれ、盛んであった。禅画は「物我一如」の純粹美を描くもので、人間への精神の内奥の根元の求めに応じて直観的に捉え

得るものである。

中国はもとより、日本においても寒山拾得の風狂にして奇怪、禅味あふれる多くの画家の創作意欲を刺激してきた。著名な禅画「十牛図」とならんで、寒山拾得を描いた作品はすこぶる多く、その上名画が多い。このことを踏まえただうえて、乾隆年間にできた「寒山」像は、完全な自由人・自然人として生き貫いた人物像となっている。超自然的ないし求心的な風狂のイメージは、実は閭丘胤の序から誘い出されたものであり、画題としての人物像もそれに拠っていたのである。

宋代以後、彼らの生き方に憧れる禅僧や文人によって格好の画題とされてきた。中国の画家では、梁楷寒山拾得画は大口でゲラゲラ笑っていることが見える。

牧溪は火太猿の両幅の中に寒山と拾得を描かれている。そのモデル作家は一四世紀頃の中国の画家顔輝である。因陀羅に寒山と拾得を楽しく話している姿が見られる。さらに漢詩のような説明書きが付けられていた。これは、中国の宋元時代の作品の特徴である。主に達磨から慧能までの禅宗の祖師達や、あるいは寒山拾得などを書くことが多い。

寒山拾得ともに、有髪の居士として描かれており、經典をもつ寒山は、智慧を司る文殊菩薩、箒をもつ拾得は慈悲（行）を司る普賢菩薩になぞらえられ、造型されている。

一九一七年（大正六）三月二十八日に、読売新聞の朝刊に新刊紹介「寒山拾得」に關した『寒山詩評釈』が紹介されていた。また一九二四（大正一三）年一月一日同じく朝刊四面で横山大観作「寒山拾得」の画が掲載されていた。さらに、一九二六（大正十五）年三月二二日 読売新聞の朝刊四面に富岡鉄斎「寒山拾得」の宣伝がある。そして、「寒山拾得」のタイトルで、一九三〇（昭和五）年三月二九日に読売新聞の朝刊で挿絵が豊富で文章も立派である。最後に、一九五七（昭和三二）年九月一〇日に、同じく読売新聞に、歌舞伎座で演劇した「寒山拾得」を鑑賞した後で感銘を受けた記事が見られる。ここから「寒山拾得」は「面白の楽の音」として日本に広がっていたことが分かる。

まとめに

以上、中国の「寒山拾得」と日本の「寒山拾得」は、国・地域が異なれば、そこに住む人々も文化も歴史も異なるように、長い年月を経て生き続けるうちに多少異なっていた。

中国の「寒山拾得」は昔は注目されたものの、近代は文化的にも殆ど影響を与えることなく忘れ去られたような存在である。

しかしながら、日本では多くの著名な作家が取り上げ、文学・芸術などに大きな影響をもたらした。

近代日本は明治以降、文明開化の言葉に代表されるように西欧の哲学・風俗・文学・など多種多様な文化を取り入れた。日本人の知的関心・美的価値の基準は、中国志向から西欧志向へ急展開した。その中で、再び東洋（中国）思想の回帰が起こる。大正から昭和初期にかけての日本文学界には超俗的に風狂で人生を貫徹した「寒山拾得」が多く登場する。古来よりの日本の仏教文化の中の形を持たない禅思想が「寒山拾得」という形象化した形をとって登場する。この形象化した禅の形は、取り付き安かったのか、文学の他にも禅画や歌謡など広く日本文化の中に登場した。

従って、日本近代文学で登場する「寒山拾得」は当時の東洋思想回帰の流れの中で、特に日本で育まれた仏教思想・禅思想の形象化を担った存在であったと結論付ける。

註

- (1) 奇瑞というのは、めでたい吉兆という意味である。中国で、「寒山拾得」はその代表である。婚礼のときに祭る神である。ともに蓬頭で笑顔、緑衣を着け、一人は棒と鼓を持つ。二仙、二聖とも呼ばれている。
- (2) 張石「唐代詩僧寒山与日本近現代文学」(『日本研究』二〇〇

九・第一期

- (3) 古田島洋介「『寒山拾得』原拠再考」(『国文学 解釈と教材の研究』一九八二・七月号)
- (4) 薛飛「中国地方志集成・江蘇府縣志輯」(江蘇古籍出版社・一九九一・九)
- (5) 贊寧『宋高僧傳』(北京中華書局・一九八七)
- (6) 道原『景德傳燈錄』(中文出版社・一九七六)
- (7) 嚴雅美『潑墨仙人圖研究—兼論宋元禪宗繪畫』、台灣：法鼓文化、二〇〇〇
- (8) 任平「寒山精神：走向全球的「和合」文化」、認為「和合文化」：「是以『和合』為內在靈魂將儒道佛三者貫通的文化。」(『寒山寺文化論壇論文集』(北京：中國文史出版社、二〇〇八年)、頁四〇。
- (9) 同注(7)
- (10) 谷脇理史・岡雅彦『假名草子集』小学館・日本古典文学集六四・(一九九九・九)
- (11) 井伏鱒二「陣痛時代」(『創刊号』一九二六・二)

(るー えん 特別研究員)